

(様式2)

令和7年度 自己評価書及び学校関係者評価書

1 学校教育目標・本年度の重点目標

学校教育目標 □元気な子 心の美しい子 ねばり強い子 仲よくする子 考える子
 本年度の重点目標 『すべての子どもが生きる学校』～ひろげる・つなげる・じぶんから～

2 本年度の経営方針

自己決定感・有能感・他者受容感 自己調整能力 目的意識・役割意識 安心安全

3 自己評価結果および学校関係者評価の結果(達成状況をA・B・Cの三段階で評価)

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
自己決定感 有能感 他者受容感	人間尊重の教育を推進し、自己指導能力を育む	B	自己決定感・有能感・他者受容感を重視した指導が意識されていた。「挨拶の指導」や「キャリアパスポート」を活用した振り返りを大切にし、自分が大切にされているという実感をもてるようにする。	A	A
豊かな心	多様性を認める子を育む	A	子どもたちがお互いの良いところを見付け合う「よかつたねカード」の取組や、学習や生活の中で交流する場面を多くもつことで、互いに認め合える関係づくりができた。	A	A
	感謝の心をもち、共生できる子を育む	A	今年度も異学年グループでの「羊っ子」の活動を大切に取り組んできた。上級生が下級生のために活動を進め、下級生は上級生に感謝の気持ちを伝える活動を通して、互いに共生できる関係づくりを進めることができた。「あいさつ」についてもより充実できるような指導を継続していく。	A	A
	未知に挑む子を育む	A	児童委員会やクラブ活動で、目的意識や役割意識を大切にしながら、主体的に活動する子どもたちを育むことができた。今後は札幌市が進める「自治的な活動」について、羊丘小として取り組める内容をさらに工夫していく。	A	A
学ぶ力	能動的に学ぶ子を育む	A	「能動的に学ぶ子の育成」を研究主題として授業改善に取り組んできた。「～したい」という子どもの思いを大切にすため、「たいが生まれたい」がつながる授業をイメージし、事象や自分、そして他者と能動的に関わる子どもの姿を求めてきた。次年度も校内体制を見直し、授業改善を進めていく。	A	A
	内容と方法の基礎・基本を身に付け、学習に生かす子を育む	B	外国語や理科の専科指導や、担任交換授業などを行うことで、子どもたちの個に応じながら、学習の基礎基本を定着させるように取り組んできた。次年度も、それぞれの学年の実態に合わせながら、全校で取組を進めていく。	A	A
健やかな体	安全に生活する子を育む	A	安心安全な生活を重視して指導を行ってきた。校内外の決まりについて、子どもたち自身が意識して生活できるように、日常の声掛けを大切にできた。児童委員会の取組でも、生活の決まりを守るための活動をすすめてきたが、さらに充実させていく。	A	A
	運動に親しむ子を育む	A	運動機会充実の取組として、ラグビーやダンスの外部講師を招いて授業を行った。また、昨年度から自動タイム計測装置やジャンピングマットや「なわとびビンゴ」の取組も継続して行うなど、運動に親しむ環境を整えてきた。次年度は、さらに活用の幅を広げていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	多様な思いが飛び交う中で、先生方の御苦労御並々ならぬものと思います。子どもたちが自分で考えて行動できる「タネ」を大切に育ててくれることを期待しています。いつも様々な工夫をされている様子で、子どもたちからたくさん報告をもらっています。				
分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
札幌らしい特色ある学校教育の推進	雪に親しむ子を育む 自然・文化に親しむ子を育む 読書に親しむ子を育む	A	生活科や総合的な学習の時間で雪と親しむ活動を行っている。更にカリキュラムを整理して、系統立てて取り組めるようにしたい。読書については、朝読書の時間や教師による読み聞かせを行い、読書に親しむ取組を進めてきた。また、ビオトープの活用により自然に親しむ環境を整えてきた。	A	A
特別な配慮を要する子どもへの教育	多様な学びの場を創造する	A	児童情報交流会を行い、配慮が必要な児童について職員間で共有して指導にあたってきた。ブロック研修の時間や州での活用して日常から児童の様子について確認をしてきた。交流及び共同学習・交流学習を行うことで、担任1人だけでなくチームで多様な学びの場をつくった。	A	A
家庭や地域とともにある学校づくり	学校評価の充実と活用を図る	A	学校行事や参観授業で来校いただいたり、ホームページに日常の様子を載せたりするなど、教育活動について公開してきた。保護者アンケートの結果を基にしながら、教育課程改善に努めてきた。	A	A
	家庭・地域と連携・協働する	A	地域にある施設の活用や、町内会連合会・まちづくり協議会などと協働した学習を進めることができた。SSリポーターの取組も継続し、今年度2名増えて現在15名が登録されている。令和8年度から始まる地域学校協働活動「コミュニケーションスクール」へとつないでいく。	A	A
実効性の高い危機管理と安全教育	危機管理体制の構築と登下校時の安全確保	A	より実効性のある避難訓練を行ってきた。防火扉を作動させた訓練や児童会館・地域会議室と共同での訓練も行った。集団下校についても、下校班や体制を見直してきた。さらに一年間の訓練の時期を見直していく。また、スクールゾーン実行委員会の情報や御意見も取り入れ、登下校の安全についても見守りを続けていく。	A	A
	危機的状況における適切な意思決定と行動選択の力を培う	B	間違いや失敗から学ぶ機会を重視し、子どもたちが実際に危機を回避するための思考力・判断力を育もうと取り組んできた。避難訓練や集団下校訓練などの取組時に、実際に災害が起きた状況をどれだけイメージしながらできるかを課題に取組を進めていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	生活の中にドスンと入りこんできたあらゆる災害、地震や野生動物など、知識無くては行動に移せないことも、たくさん体験を通して恐れるだけでなく対策を考えてくれる子どもにもなれると考えます。大切なことは子どもから教えられるということも少なくありません。情報交換をとても丁寧にしてくださるため感謝しています。いつも細やかな対応をありがとうございます。今後ともよろしく願います。				